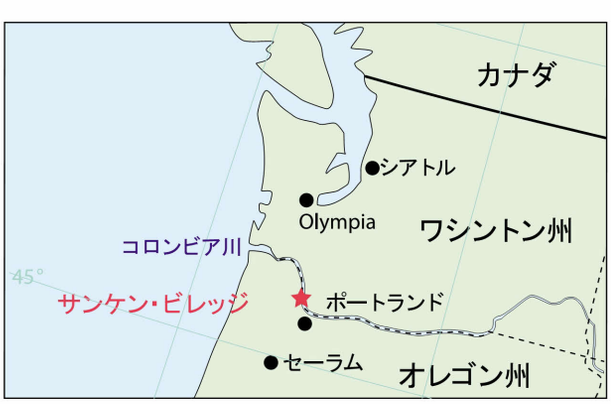
オレゴンからの報告

2007年９月14日から22日までの９日間、米国オレゴン州の発掘に参加してきました。話の発端は、「オレゴン州のコロンビア川の河原でドングリが詰まった貯蔵穴を見つけたので、再発掘に協力して欲しい」というメールが、昨年の秋、古くからの友人であるワシントン州ピュージェットサウンド・コミュニティー・カレッジのデール・クロースさんから届いたことからでした。

日本でも、縄文時代の人々は、秋になると大量のドングリを穴の中で保存して、食物が乏しくなる冬から春先の季節に備えていました。弥生時代になっても、天候不順で米が実らない場合の救荒食料として、ドングリを蓄えていたことが、各地で発掘されるドングリピットからわかります。ただ、東日本では乾燥した丘陵上に「フラスコ状ピット」という、口がすぼまり、底が広くなる穴に貯蔵していたのに対して、西日本では地下水が湧いてくる湿地に素堀の穴を掘ってドングリを貯蔵していました。なぜ、わざわざ水漬けの状態でドングリを貯蔵したのかは、ドングリのあく抜きのためだとか、虫除けのためと言われているのですが、よくわかっていません。

太平洋を隔てた北米大陸のカリフォルニアから南アラスカにかけての先住アメリカ人（アメリカ・インディアン）も、さかんにドングリを食用としていました。その中心とも言えるオレゴン州で水漬けのドングリピットが見つかったというので、発掘に参加することを決めたのです。

ところがドングリの専門でもない私が、単身で参加してもお役に立てるとは思えず、貯蔵穴に造詣の深い山本直人さん（名古屋大学教授）や、貯蔵穴の発掘経験が豊富な宮尾亨さん（新潟県立歴史博物館学芸員）、岩崎厚志さん（前國學院大學助手）、管野智則さん（東北大学助教）らの友人を誘って参加しました。



サンケン・ビレッジ遺跡の位置

発掘はシャワーで表面の泥を洗い流すことから始まる

ロッキー山脈の西麓の水を集めて太平洋に注ぐコロンビア川は、全米でも代表的な大河の一つです。今回発掘に参加したサンケン・ビレッジ（Sunken Village）遺跡は、コロンビア川の中州、ソーベ（Sauvie）島の西岸に立地します。日本からの移民で知られるポートランド市から、北へ車で１時間ほどのところです。河口からこの島まで約70㎞もあるのですが、それでも満潮時には遺跡が水没してしまいます。

ドングリピットは川の汀線と堤防の間の砂質の岸辺に数十基が分布し、シャワーの水で表面に薄く堆積した泥を流し去ると輪郭が姿を見せます。重複しているピットが多いので、毎年のようにこの場所にピットが掘られたこともわかります。ちょうどここで中州の小川が本流に合流し、地下水脈が豊富だったからなのでしょう。穴を掘って木の小枝や葉でまわりを囲って隙間をつくり、そこに編みかごに入れたドングリを埋めたという、乾燥した遺跡ではわからなかったピットの構造も、水漬けだったおかげでわかりました。こちらのドングリは、落葉性のカシ類（オーク）でアクが強く、そのままでは食用になりません。食べるときにはドングリを粉々に砕いて、水に晒す必要があります。クロース氏は今、ドングリの年代測定を依頼するとともに、研究室の水槽に貯蔵穴の模型をこしらえて水を循環させ、粒のままでドングリのあく抜きができるものか実験しています。

遺跡周辺には宿泊施設がないので、テントを設営して寝泊まりしました。今年の日本の９月は、例年にもまして残暑が厳しかったのですが、オレゴンでは夜がふけると、ズボン、フリースを身につけていても冷気が寝袋の中にまで侵入して、寒くて眠れない夜が続きました。

（埋蔵文化財センター　松井 章）